

# 水の 話

FujiClean NEWS

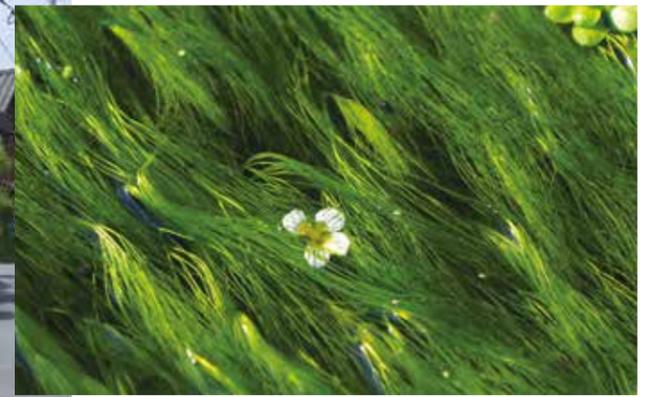
2024  
Summer

NO.204

【特集】

再注目される  
環境に優しい  
かぼた  
川端文化

人と自然が支え合う生水の郷・針江<sup>しょうず</sup>



# 再注目される 環境に優しい川端文化

## 人と自然が支え合う生水の郷・針江

滋賀県高島市にある針江地区には、豊富な湧水とともに、昔ながらの水利用システムである「川端」が今も残り、利用されています。山で育まれた地下水や湧水を慈しんで利用し、水を汚さずに母なる湖へと還していく。そんな、私たちの生活が自然のサイクルの一つになっている「川端」は、奇跡的に現代まで残ったエコシステムです。そこには、人と人、人と自然がつながる「暮らしの文化」が息づいています。



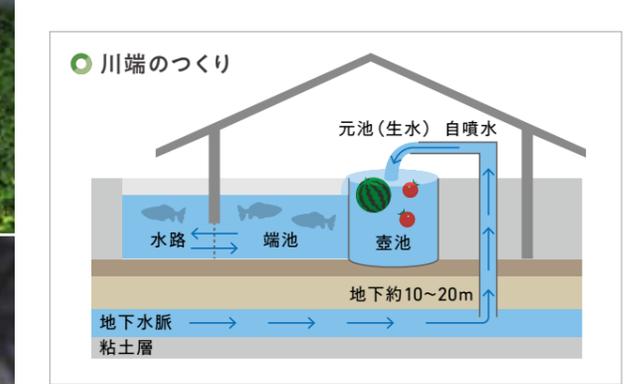
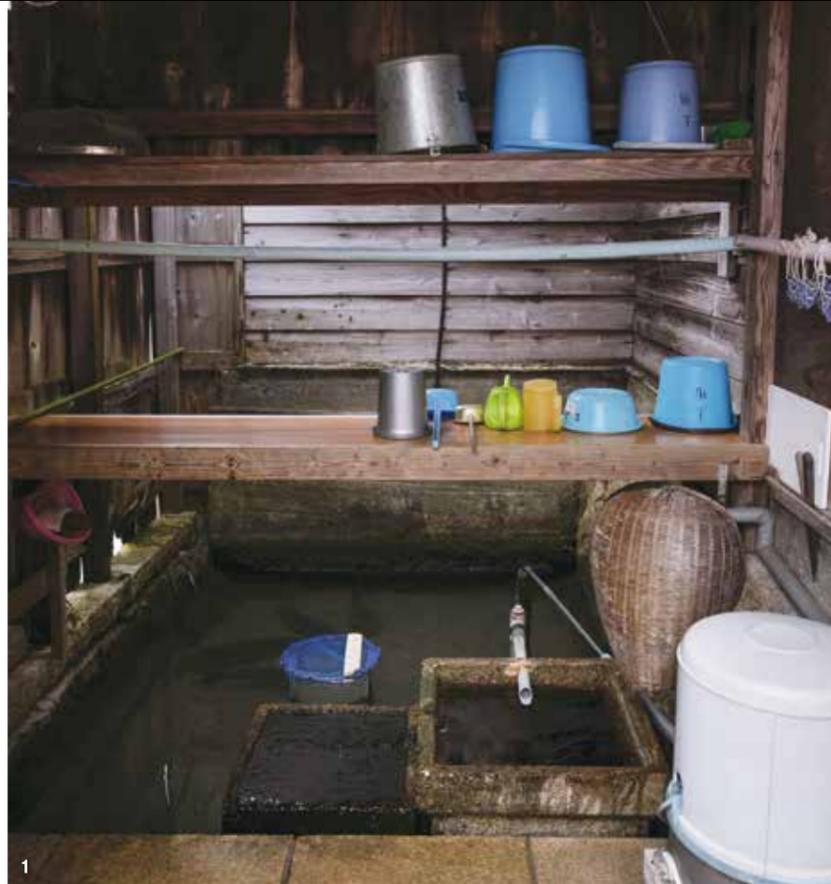
### DATA 2024年2月現在

滋賀県高島市  
(人口45,681人 世帯数20,876世帯)

現在の高島市は、2005(平成17)年にマキノ町、今津町、朽木村、安曇川町、高島町、新旭町の5町1村が合併して誕生しました。琵琶湖岸から福井県若狭地方との県境まで市域は広がり、面積は琵琶湖を上回る693.05平方キロメートルと、滋賀県内では最大です。市の面積の約72%が森林で、琵琶湖に注ぐ水の約3分の1を生み出しています。

[取材協力・写真提供・資料提供]  
○ 針江 生水の郷委員会 ○ 高島市観光協会

- [参考資料]
- 台所を川は流れる 地下水脈の上に立つ針江集落 (小坂 育子 著者/株式会社新評論 発行)
  - 地域再生 滋賀の挑戦 エコな暮らし・コミュニティ再生・人材育成(近江環人地域再生学座 編/株式会社新評論)
  - 日本の国土とくらし 里山の人のくらし (千葉 昇 監修・指導/渡辺 一夫 文/株式会社ポプラ社 発行)
  - 針江生水の郷 [Webサイト](https://harie-syozu.jp/)  
<https://harie-syozu.jp/>
  - 高島市 [Webサイト](https://www.city.takashima.lg.jp/index.html)  
<https://www.city.takashima.lg.jp/index.html>



1. 現在も使用されている針江地区の川端。周りには水仕事に使う道具が置かれています
2. 外川端の小屋の外観。脇には水路が設けられ、隣の家とつながっています
3. 水路の脇には魚が休める隙間がつくられています
4. かつては住宅地だった空き地に残る川端。周りにはクレンソウが生い茂っています
5. まちを歩くと、水の大切さを伝える看板が目に入ります
6. 年に4回行われている針江大川の清掃活動の様子

## 水とともに生きる、昔ながらの川端の暮らし。

### 琵琶湖の3分の1の水を生み出す高島市

滋賀県は、日本の東西軸のほぼ中央に位置し、面積の半分以上を山と湖が占めています。さらに県の6分の1を占める琵琶湖は日本最大の淡水湖で、周囲235キロメートル、水量275億トン、1,700種以上の水生生物が生息する生きものの宝庫です。県の周囲を山脈や山地が取り囲み、山々に降った雨や雪は大小400本以上の河川を通じて琵琶湖に注ぎ込んでいきます。琵琶湖の集水面積は県の96%に達しており、県内のほとんどの地域の水が琵琶湖へと集まっています。そのため滋賀県では、各地域が琵琶湖の恵みとともに自然と向き合い、独自の暮らしや文化を育んでいます。

琵琶湖の北西部に位置する高島市は、比良山系を源とするいくつもの溪流が安曇川となり、麓の田園地帯を潤しながら琵琶湖へと流れ出ており、その量は琵琶湖に注がれる水の約3分の1とされています。中でも安曇川下流の扇状地にある新旭町の針江・霜降地域は、安曇川の伏流水がいたるところで湧き出ており、住民は古くからこの湧水を、「生まれ出ずる水」「生かされる水」の意味から「生水(しょうず)」と呼んで大切にしてきました。そのまろやかで美味しい軟水は、平成の名水百選にも選ばれています。

### 注目された昔ながらの水利用システム

琵琶湖に流れ込みたい地下水が琵琶湖の水圧によって行き場を失い噴き出したのが、「生水の郷」として知られる針江地域です。その湧水量は、1日約4,000キロリットル、約20,000人が生活できる水の量にのぼります。地下約20メートル前後から湧き水が自噴しているため、上水道が普及する以前は、飲料、炊事、洗濯などのすべての生活水を湧水でまかなっており、各家で水場として日常的に利用されてきたのが「川端」です。川端は、昔ながらの自家湧水による水利用システムで、水資源としてだけでなく、水仕事になくてはならない存在として使われてきました。弥生時代中期の遺跡からも川端の遺構が見つかるなど、その歴史は2000年以上とも言われています。長きにわたって生活の一部として利用されてきた川端ですが、2004(平成16)年にNHK制作によるドキュメンタリー番組で紹介されると、国内外から大きな反響を受けました。この地域に当たり前に残る川端が、外の目から見ると「価値ある文化」として高く評価されたのです。それは、針江地区で暮らす人たちにとっても大きな気づきとなり、今もなお多くの家庭には川端が残され、水道水と併用して活用されています。

### 川と隣り合わせのもう一つの「台所」

かつて針江には110の川端があり、そのうち100軒で今も利用されています。川端は3つの池から構成され、湧き水を取水するところを「元池」、水を汲み上げたところを「壺池」、壺池からあふれた水を溜めておくところを「端池」と言います。壺池に注がれた湧水は主に飲み水や洗顔などに使われ、壺池からあふれた水は一段低い端池に落ち、ここで野菜や食器などを洗います。端池は生簀のようになっており、その中をコイが泳ぎ野菜の洗いやすさや食器についてご飯粒などを餌として食べるため、水はいつも濁りなく透明です。このように3つの池が湧き水を巧みに利用して、水を汚さないエコな循環システムを作り出しています。また水温は年間を通じて約14度と安定していることから、夏には壺池に野菜やスイカを浸けると適度に冷たくなり、冬にはあたたかな水が洗い物の負担を軽減してくれます。口当たりの良い軟水のため料理にも最適です。近年は、川端以外でも手軽に湧水を利用できるよう、ポンプで家の中に圧送しています。また川端はそれぞれの家が使い勝手のいいように設えていて、家の外に設置された小屋づくりの「外カバタ」と、家屋の中にある「内カバタ」があります。川端はまさに、住民にとって

のもう一つの台所。だからこそ、それぞれの家が受け継いできた歴史を感じさせてくれます。

### 水のつながりは、人のつながり

川端のある針江のまちは、碁盤のように張り巡らされた水路が家々をつないでいます。そのため、泥のついたものは下洗いをし川端ではすすぎだけを行うなど、「上流の人は下流にいる人のことを思い、下流の人は上流の人は決して汚い水を流さない」という暗黙の約束事、思いやりの心が根付いているのです。川端文化が今もなお生き残ってきた最大の要因は、川端を使う人誰もが決して水は汚さない、「安心の水」でつながっているという確固たる信頼が育まれてきたからだと言えるでしょう。

こうした日常的な行いと合わせ、川の維持管理として年に4回、住民総出で川の中の空き缶などのゴミをさらう掃除を実施。さらに定期的に藻刈りを行うことで、生水が湧き出る針江大川の水は、年中きれいに保たれています。刈り取った藻は、決して琵琶湖には流さず、下流で回収して田んぼの肥料などに利用しています。こうした環境保全によって、大切な川端文化と美しい景観が残されているのです。

# 川端のまちに息づく美しい水辺風景。

## 「水は宝」を体感するまち風景

針江のまちを歩いてみると、各家だけでなく空き地や脇道などにもかつて使われていた川端が残されていることに気がつきます。そこには、こんこんと美しい水が湧き出ているため、子どもが通学途中に喉を潤す様子や、遠方から水を汲みに来る人の姿を見かけます。また水路の水の30%ほどは安曇川から水田に引いた水で、残りの70%は川底や護岸、川端などあらゆる場所から流れてくる湧水のため、針江を流れる水は常に濁ることなく澄んでおり、清流にしか生えないといわれるバイカモの群生が水面を揺らします。夏になると下流からのぼってきたコイやアユが自由に泳ぎながら行き来し、子どもたちが水遊びに興じるのも日常の風景です。

他にも中央公園には、かつて田んぼに水を運ぶために使われていた水車が置かれ、まちのシンボルになっています。また道筋でみかける木造の常夜灯は、公共下水道の空気を取り入れる取入口を隠すために設置されました。中央公園の常夜灯は水車の力で発電しており、ここでも水の恵みとエコな精神が息づいています。川沿いには「水は宝」と書かれた看板が掲げられているように、針江はあらゆる場所で水との共生を感じることができるまちなのです。

## 水の恵みを生かした特産品

さらにこの地域では、名水を生かした昔ながらの特産品が大切に守られています。130年の歴史を持つ上原豆腐店では、創業以来、生水を使って豆腐をつくり、壺池の水にさらして豆腐を販売。水道水とは違い、混じりつけない澄んだ水からにがりをつくと、格段に美味しい豆腐ができるのです。今でも1日30丁、油揚げ40枚をつくり、なじみのお客さまに配達もしています。冷やされた豆腐は他では味わえないと人気で、その場で食べる人もいます。

また1865(慶応元)年創業の川島酒造は、150年の歴史を持つ蔵元です。豊富な米と水に恵まれた土地柄を生かした酒造りを行っており、銘酒「松の花」は、契約農家で栽培された良質な滋賀県産のお米と、仕込み水に針江の生水を使い、日本全国にファンが広がっています。さらに近年は、新たにウイスキー事業をスタートし、生水をつかったウイスキーの誕生に大きな期待が高まっています。他にも、佃煮店のおさかな旭では、アユ、モロコ、ワカサギといった琵琶湖で取れる魚を使った佃煮や醤油煮などを販売。この地域の風土が生み出す味わいが豊かな特産品を生み出し、大切に守られ、今に伝えられています。



1. 曹洞宗正伝寺境内には、豊富な湧水でつくられた亀ヶ池があります
2. 針江の生水からつくられた「松の花」は川島酒造の代表的な銘酒
3. 昔と変わらぬ手作り豆腐で人気の上原豆腐店
4. おさかな旭では佃煮や耐煮しなどをお手軽な価格で販売
5. おさかな旭の敷地内に、水道水と湧水を飲み比べできる水道が設置されています
6. 内湖へつながる針江大川。多くの生きものが集まっています
7. 琵琶湖針江浜の湿地帯にはヨシが群生。ノウルシが生息し、4月中旬頃に黄色の花を咲かせます

## 川端から琵琶湖に続く水辺景観

川端をはじめとする美しい水辺景観は、その価値が認められ2010(平成22)年8月に「高島市針江・霜降の水辺景観」として国の重要文化的景観に選定されました。文化的景観とは、自然と人の暮らしが作り上げてきた文化的な風景を指しており、高島市新旭町針江の湖岸沿いに残るヨシ群落一帯と琵琶湖水域を含めた区域ならびに針江・霜降集落、その2つを結ぶ針江大川とその間に広がる水田地域一帯の約295.9ヘクタールが対象範囲とされています。

針江・霜降集落を源流とする湧水は、かつては河川流域の水田を潤しながら下流の「中島」と呼ばれる内湖に流入し、琵琶湖へと流出していました。現在は、両岸の水田からの排水河川として機能しながら、水は同じように内湖に集まり、最終的に琵琶湖に流出しています。内湖に集められた水はいったん内湖の中に貯蓄されると、水中に含まれる栄養分は内湖の底に沈殿し、さらにヨシ原などによって浄化され、比較的きれいになった上澄みの水だけが琵琶湖へ流れ出す仕組みとなっています。また、内湖の底に堆積した泥は水田造成の客土として、水底に生える水草は肥料として利用されることで、それぞれ水田に還元されてきました。このように「集落-河川-水田-内湖-琵琶湖」へつながる水の流れの中で、人間の生活や生業と深く関わりを持ちながらも、

人の手が加わった二次的な自然空間として維持されてきたことが、この地域における水辺景観の特色と言えます。

## ヨシ群落を維持する伝統行事

川端からつながる琵琶湖岸の湿地帯には、古くから琵琶湖の3大ヨシ帯の一つに数えられているヨシ原・ヤナギ林が広がっています。ヨシの群生地は、まさに琵琶湖の原風景とも言うべき景観地であるとともに、琵琶湖に棲む魚類の貴重な産卵場所です。同時にヨシには富栄養化の原因となるリンや窒素を吸収し、琵琶湖の水質を浄化する作用があり、自然環境保全の面からも有意義な場所であることが知られています。またこの地域のヨシは、ヨシ簀やヨシ屋根の材料として好適だったことから、昔からこの地域の貴重な資源であり、生活の糧としても保全されてきました。

高島市では、ヨシ群落を適切な状態で維持するため、地元団体の協力のもと毎年12月上旬に「ヨシの刈取り」、2月下旬~3月上旬に「ヨシの火入れ」を行っています。「ヨシの火入れ」は害虫駆除や殺菌効果、新芽の成長を促すなど重要な役割があるため、琵琶湖の春の風物詩にもなっている伝統行事です。人の手が入ることで良好な景観が維持されるだけでなく、水に関わる生きものを育て、琵琶湖の環境保全にもつながっています。





1. 水車のある中央公園は針江の中心地。公民館が隣接しています
2. 水路では放流されたコイが気持ちよさそうに泳いでいます
3. 針江生水の郷委員会の前田さん(右)と上原豆腐店の上原忠雄さん・政江さんご夫婦(左)

● 針江 生水の郷・川端の見学をご希望の方は、事前予約(1週間前)・見学料が必要です  
 [見学料] お一人様ごとに 大人 1,000円 高校生~小学生 500円(幼児は無料)  
 見学料は会の運営や地域の環境維持改善に活用します。  
 詳しくは針江 生水の郷 公式ホームページをご覧ください。Webサイト <https://harie-syozu.jp/>

## 川端を守る、文化を守る、水を守る。

### 住民による「針江生水の郷委員会」の設立

近年、地震などの災害が多数発生し、断水が生じる度に暮らしと水の関わりの深さを痛感させられます。この地域では当たり前だった各家庭で湧水が使える環境や、ライフラインに頼らなくても暮らすことができる川端は、奇跡的に現代まで残ったエコシステムです。2004(平成16)年に放送されたドキュメンタリー番組を契機に、この貴重な川端を見ようと海外からも大勢の見学者が訪れるようになりました。しかし、外部からの目によって川端文化のすばらしい価値に気づき、多くの人に興味を持ってもらえた一方で、マナーの悪い観光客や心ない来訪者も増えてしまいました。大切に水を守り、近所の人たちと助け合いながら生活してきた住民たちにとって、大勢の観光客が穏やかな生活を脅かす存在になってしまったのです。そこで針江地区では、テレビ放映後有志による「針江生水の郷委員会(以下、委員会)」を組織。針江地域を訪れる人を案内する活動をスタートしました。大切な日常を守り住民の不安を軽減するため、見学の際には必ず委員会を通し、地元ボランティアのガイドをつけたツアー形式で行うことを徹底。訪れる見学者を排除するのではなく、新しい形で受け入れていこうと進んでいきました。

### 地域の暮らしと川端を守り続けるために

川端の多くは各家の敷地内にあり、暮らしの中で利用しているものです。だからこそツアーは、川端を日常的に利用している住民がガイド役となって案内をすることで、見学者の行動や時間などを把握しながら、川端での暮らしを伝えていきます。「決して観光地にはしない」という住民の想いを大切にしながらも、さまざまな川端や針江大川などを巡り、この地域の自然や歴史を聞くことができるツアーは好評で、見学者数は年々増加。ツアーは有料ですが、その料金は地域環境の整備などに活用されています。また委員会は案内活動に留まらず、自然環境保全活動を中心とするまちづくり活動へと幅を広げ、2005(平成17)年に農林水産省主催の「美の里づくり」の審査会特別賞、2006(平成18)年に「豊かなむらづくり」農林水産大臣賞、2013(平成25)年には環境省のエコツーリズム大賞などを次々と受賞しました。

こうした活動のおかげで、針江地域には観光客のためにつくられた土産物店やホテルが乱立することもなく、本来の暮らしだけが残されています。人々の暮らしを守ることが真の川端を守ることであり、大切な生水、そして琵琶湖の水環境を守ることにつながっているのです。



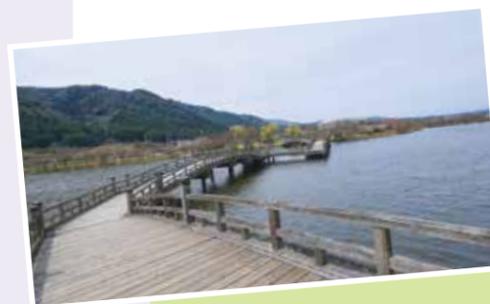
## 日本遺産にも選定! 水と人が調和する 高島市の水遺産

高島市には、針江・霜降地区以外にも「高島市海津・西浜・知内の水辺景観」「大溝の水辺景観」が国の重要文化的景観に選定されています。全国的に見ても、1つの市に3つの重要文化的景観が存在するのは高島市だけで、豊かな水環境が残されている貴重な地であることがわかります。さらに琵琶湖とその水辺風景は、2015(平成27)年に日本遺産に登録され、高島市の数々の水辺景観がその構成文化財に選定されています。



### 大溝の水辺景観

古来、若狭と畿内の結節点として栄えた港「勝野津」を中心に栄えた大溝地区は、周辺の地名が万葉集などの文学作品に登場しています。琵琶湖の内湖である乙女ヶ池は、奈良時代最大の内乱である「藤原仲麻呂の乱」の最終決戦の地としても知られています。さらに大溝では、山からの湧き水や井戸水を巧みに利用する生活形式が今も伝えられています。



### しらひげ 白鬚神社

琵琶湖に浮かぶ大鳥居が有名な、近江最古の神社です。その神秘的で印象的な姿は「近江の巖島」とも呼ばれ、その美しさは松尾芭蕉や与謝野晶子の詩歌にも詠まれたほど。「白鬚」という社名が示すとおり、延命長寿の神様が祀られており、参拝客も多い滋賀の絶景パワースポットです。境内には紫式部をはじめとする著名な歌人の歌碑があり、これも見所の一つとなっています。



### 海津・西浜・知内の水辺景観

海津・西浜・知内地区は琵琶湖北部の主要な港町・宿場町として漁村として栄えた場所で、湖岸に築かれた防波石垣が特徴です。2008(平成20)年に全国で5番目の重要文化的景観に選定され、海津・西浜の石積みのほか、漁業組合の旧倉庫、町家などを、景観を構成する重要な要素として定めています。町家は江戸時代末期の建築で、街道沿いの宿屋・商店として建てられた木造の建築です。



### 高島市 Takashima City



### シコブチ信仰

「シコブチ神」は筏乗りの守護神で、安曇川水系の地域に伝わる独自の信仰です。筏乗りは木材を水上輸送する命がけの仕事であったことから、川の魔物から護ってくれるシコブチ神を信仰し大切に受け継いできました。シコブチ神が息子と筏で安曇川を下り大溝に達した時、カッパがいたずらをして息子を引込みとうとしたのでこらして筏乗りの安全を約束させた伝承も残っています。  
 ※安曇川流域山間部には「シコブチ」という名の神社が15社、神社跡が2社、講が2つあります。



## オマーン国水公社と 浄化槽の普及を目指した認証試験に 関する覚書を締結！

フジクリーンは、2024(令和6)年3月6日、オマーン国の水公社であるNama Water Services社およびGREEN TECH ENERGY AND WATER社(GTEW)と浄化槽の普及を目指した認証試験の実施に関する覚書を締結しました。これにより、フジクリーンの浄化槽技術がオマーン国の下水処理および汚泥処分のコスト軽減に活用されることを目指します。さらにこの締結によって、オマーン国の排水基準値を満たすことができるかを確認するためのパイロットプロジェクトに基づく認証試験も実施されます。

岩肌が露出する山々に囲まれるオマーン国では、排水管や暗渠の設置が困難な地域があります。そのような地域では、汚水は下水貯留タンクに貯留され、汚水回収車で引き抜きされるため、高額な処分費がかかるという課題があります。フジクリーンの浄化槽技術は、維持管理の容易さと低コスト、集中下水処理場と同等の処理能力を持っているため、分散型アプローチ

により遠隔地や散在する住宅地でも使用可能。将来的には、浄化槽の普及により汚水未処理率の改善や、下水貯留タンクの汚泥処分コスト低減化の実現を目指しています。またこのたびの覚書締結は、一般財団法人中東協力センター様開催のビジネスミッションでのビジネスマッチングにより実現しました。これからもフジクリーンは、国内外のパートナーと協力し、社会に貢献する製品・技術の開発に取り組んでいきます。



## FOOMA JAPAN 2024に フジクリーンが出展しました。



フジクリーンは、2024年6月4日(火)~7日(金)に東京ビッグサイトにて開催された「FOOMA JAPAN 2024」に出展しました。FOOMA JAPANは、最新の食品製造技術やサービスを直接体験できる機会を提供する世界最大級の総合展示会で、4日間で国内外の食ビジネスに携わる方々113,777名が来場しました。(※FOOMA JAPAN 2024公式サイトより 2024.6.10)

フジクリーンは、産業廃水処理装置メーカーとしての認知度の拡大を目的に、今回初出展しました。ブースでは、廃水処理装置における2,000件以上にのぼる豊富な実績とともに、それを支える確かな技術を紹介。さらに、物件の規模や水質に合わせた最適なプランを提案できることや、設計から維持管理まで対応できる一貫体制など、フジクリーンの強みをPRしました。ブース

に訪れた方からは、「工場建設計画があるため打ち合わせをしたい」、「お客様から産業排水処理に関する問い合わせがあったらフジクリーンを紹介したいので、情報を知りたい」「コンクリート製の処理槽と比較してどのようなメリットがあるのか」などのお問い合わせをいただき、関心の高さを実感することができました。



## フジクリーンのWebサイトで、 小型浄化槽のマンホール数や汚泥引き抜き量 をご確認いただけます！

フジクリーン小型浄化槽の生産中および生産を終了した製品の情報をご覧いただけます。

【掲載内容】●機種や処理方式 ●発売や生産の開始・終了時期 ●マンホール蓋のサイズや枚数 ●汚泥の引き抜き量 ●必要風量

### 小型浄化槽新旧一覽

Webサイトはこちら



## 従業員の会社への理解と共感を深める 経営計画説明会を開催しています。

フジクリーンでは、年に1度、すべての従業員に対して経営理念や経営状況について説明する「経営計画説明会」を実施しています。会社への理解と共感を深め、従業員のモチベーションアップや帰属意識を高めることによって組織の一体感を醸成することを目的に、2008年から毎年開催。各部署や支店、営業所、工場、海外拠点に向けて行っています。

説明会では、経営状況の説明に加えて、社長、役員、部署長からのメッセージや、方針・戦略の説明もあり、従業員各々の仕事が会社全体の目標にどのように貢献しているかを丁寧に伝えていきます。さらにフジクリーンが目指すビジョンの背景やそこに至る想いを説明し、会社の考え方や今後の方向性に対する従業員の理解と共感を深めています。また説明会の内容を、それぞれの業務に関連が深い事柄に置きかえて考えることで、すべての従業員が経営計画を自分事として捉え、

全員で目標や理念に近づく活動ができるように工夫を凝らしています。

このような取り組みは、従業員が企業理念や中長期的な経営計画に対する理解を深めることに加え、従業員から経営計画に対する意見や提案をもらう機会となっており、会社課題の発見や経営計画のブラッシュアップにもつながっています。



もっと  
motto!  
広げよう

水環境をきれいに  
する取り組み

(愛知県豊田市)  
かみたまき  
上鷹見小学校



谷口 隆教頭\*  
※2024年3月時点

## 希少な自然が残る「鷹見の里」を、 全校児童で学びながら守っていく。



ビオトープでの池の生き物調べの様子



▲トンボを呼び寄せるための  
田んぼづくり

愛知県豊田市にある上鷹見小学校は児童数約70名、2021(令和3)年に創立150周年を迎えた伝統ある小学校です。学校周辺には里山や田んぼ、上高湿地などの自然が多く残り、34年以上にわたって地域環境の保全活動を続けています。地域のササユリの数が減ってきたことから、1990(平成2)年にササユリの保護活動を始めたことが最初のきっかけでした。毎年ササユリが咲く6月頃に「ササユリ集会」を開催し、ササユリの開花予想や一行詩コンテスト、保護者も協力して学区のササユリの数を数えながら周知看板の交換をしています。また近年、特に力を注いでいるのが「学校ビオトープ」での活動です。はじめてビオトープが作られたのは2001(平成13)年。きっかけは当時の4年生がメダカの生息する休耕田が取り壊されてしまうということを知り、メダカを移す池を2年がかりで完成させたことでした。この池は「きらきら池」と名付けられ、6年生になった児童を担任した谷口先生が、自然や環境を学ぶ探究的な学習の教材と

して活用を始めました。今では「どきどき池」「トンボの楽園」など新たな生息場所を増やしています。

現在このビオトープは子どもたちの成長に合わせてさまざまな“学び”に活かされています。1~3年生は生き物と親しみながら草花遊びや図工・写生会、4~6年生は池の補修などの環境整備を中心に地域の生き物の棲みやすい環境づくりを行います。例えば、昨年の4年生は「赤トンボ」を目標種に決め棲みやすい環境をつくり、飛来させることに成功。その取り組みを「第31回全国トンボ市民サミット」の豊田大会で発表するなど、自分たちの試みを広める活動も行っています。また、2022(令和4年)には全国学校・園庭ビオトープコンクールで文部科学大臣賞を受賞。ビオトープを長く続けていく中で、子どもたち自身が活動の目的を理解し、美しい自然を残すために何ができるかを考え、言葉で伝える機会をつくっています。今後も子どもたちが主体となって楽しみ、周りにある貴重な自然を守り、育てていけるよう活動を続けていきます。

## 美しい水を守る フジクリーン工業株式会社

本社 名古屋市中種区今池四丁目1番4号 〒464-0850 TEL(052)733-0325 <https://www.fujiclean.co.jp>

札幌支店 (011)738-5075	宇都宮営業所 (028)625-4650	三重営業所 (059)213-5520	宮崎営業所 (0985)32-3064
東北支店 (022)212-3339	群馬営業所 (027)327-5611	和歌山営業所 (073)422-3634	鹿児島営業所 (099)257-3501
東京支店 (03)3288-4511	埼玉営業所 (048)660-5050	広島営業所 (082)843-3315	沖縄営業所 (098)862-9533
名古屋支店 (052)249-5100	千葉営業所 (043)206-5171	高松営業所 (087)869-8680	
大阪支店 (06)6396-6166	新潟営業所 (025)271-8668	松山営業所 (089)967-6123	
福岡支店 (092)441-0222	山梨営業所 (055)275-9300	高知営業所 (088)803-1520	
盛岡営業所 (019)604-2527	松本営業所 (0263)27-2080	佐賀営業所 (0952)31-9151	
郡山営業所 (024)937-0800	岐阜営業所 (058)271-1131	熊本営業所 (096)388-3571	
茨城営業所 (029)851-0031	静岡営業所 (054)286-4145	大分営業所 (097)558-5135	



発行 2024年7月1日  
フジクリーン工業株式会社「水の話」編集室